

「阪南2区人工干潟におけるSDGs活動」トライアルの概要

- 日 時 令和4年5月4日（水・祝）13:00～15:50
- 場 所 阪南2区（ちきりアイランド）人工干潟（岸和田市）
- 主 催 CIFER・コア、共和海建グループ、きしわだ自然資料館
- 参加者数 42名（共和海建グループ24名、きしわだ自然資料館15名※、CIFER・コア関係者3名）
※資料館が公募した一般参加者を含む
- 行 程 13:00 地蔵浜みなとマルシェ集合 きしわだ自然資料館から挨拶
13:10 みなとマルシェを出航 阪南2区の周囲を回航
13:40 阪南2区棧橋に着岸
13:50 CIFER・コアから干潟造成の経緯等の説明
14:00 干潟の観察・生物採取
15:00 採取生物について各講師の説明
- ・岡本 素治氏（きしわだ自然資料館館長）による植物
 - ・児嶋 格氏（きしわだ自然資料館専門員）による貝類
 - ・柏尾 翔氏（きしわだ自然資料館学芸員）による海岸生物
- 15:40 人工干潟を出航
15:50 みなとマルシェに帰港 解散



○内 容

CIFER・コアでは、令和4年度から共和海建グループ及びきしわだ自然資料館等と連携して「阪南2区人工干潟におけるSDGs活動」を展開することとしており、現在、企画・調整を進めています。この活動は、海生生物の棲息の場やブルーカーボンなど、様々な機能を有する阪南2区人工干潟において、多様な主体によるSDGs活動（生物観察会、野鳥観察会、アマモの移植・養成活動、漂着プラスチックゴミの清掃等）を継続的に推進し、海の環境保全や干潟の持続的な維持管理に寄与することを目的としています。本格的な活動に先駆け、5月4日にそのトライアルを行いました。

当日は絶好のお天気で、また風も適度にあり、快適なコンディションの中、地蔵浜みなとマルシェの船着場から70人乗りの船で出発しました。共和海建グループからは共和海建(株)の石川社長、セイホ工業(株)の奥澤社長、(株)河昌の谷口社長、(株)恭兵船舶の岡社長が参加され、グループの思い入れが感じられました。岸和田市漁業協同組合の音揃組合長も関係者の一員として参加されました。往路は本格的な活動の行程ではマルシェから棧橋まで約10分ですが、地域全体の状況を把握するために、特別に阪南2区を1周し

てから、人工干潟近くの栈橋に着岸しました。栈橋や踏板の一部補修、仮護岸上の通路の新設が共和海建グループにより行われ、干潟まで楽に移動することができました。

干潟に到着後、CIFER・コアから人工干潟が生まれた経緯を説明し、きしわだ自然資料館主導で現地見学会が開始されました。柏尾学芸員から危険な場所の説明があり、その後、参加者は自由に手網やシャベルなどを手に生き物の探索をしました。

植物が専門の岡本館長からは、大阪湾では絶滅危惧種であるコウボウムギという植物の群落やこれも大阪湾では珍しいというハマボウフウ、陸から流れてきた種が根付いたというオニクルミについてご説明いただきました。干潟の陸側は一面にアシの緑が芽吹き、その間にハマヒルガオが咲いていました。

1時間弱の自由探索の後、自然資料館から参加者が採取した磯浜生物の説明があり、まず貝類の専門の児島専門員から10種類ほどの貝について説明がありました。採取された生き物の中には、児島氏も生きたのを初めて見たというムラサキガイもあり、感動しておられました。また、塩を巣穴に入れると出てくるマテガイも見つかりました。この干潟には150種類くらいの貝が生息しており、大変な貝の宝庫といえます。

次に、柏尾学芸員から魚類、甲殻類の説明がありました。テッポウエビというテナガエビの一種が多く採取されましたが、このエビは片方の手でカチカチという音を鳴らすので、そのような名前が付いたそうです。スジエビ、ボラの稚魚、それに柏尾氏や音揃氏でも名前が分からないミミズより細い魚も見つかりました。

説明会の終わりに一般参加の子どもさんが「5mmほどの虫が泳いでいましたが何ですか」と言って小さな虫を持ってきました。なかなか見られない虫で、魚の口の中で生息しているようで柏尾氏は「標本にするので頂戴」と言って持って帰られました。

CIFER・コアとしては、この日のトライアルの経験を踏まえ、本格的な実施に向けて準備を進めて参ります。



▲ 阪南2区の栈橋



◀ CIFER・コアによる干潟の説明
▶ きしわだ自然資料館学芸員による生き物の解説



▲ 参加者による干潟生物の採取



▲ 帰港（地蔵浜みなとマルシェ）